

# 息子（一幕）

小山内薫

## 人物

火の番の老爺 七十歳

金次郎 二十七歳 無頼漢

「手先」と呼ばれる捕吏 三十歳位

## 時代

徳川末期

## 場所

江戸の入口

舞台にはつきり見えるものは、唯粗末な火の番小屋だけである。雪がさかんに降つてゐるので、右も左も奥も前も、ただ一面に白いだけである。火の番小屋には明かりがついてゐる。障子が一枚明けてあつて、襟巻頭巾に顔を埋めた火の番の老爺が、土間で焚火をして、あたつてゐるのが見える。十二月の或晩の夜半過ぎである。

幕が明くと、「手先」と呼ばれる捕吏が、あたりに目を配りながら出て来る。二、三度火の番小屋の前を行つたり来たりする。やがて、小屋の前に立ち留り、火の番の老爺に呼びかける。

捕吏 とつつあん。まだ生きてるな。

火の番 （顔を上げる）生きてるとも。誰だ。をかした事を言ふのは。

捕吏 誰でもねえ。おれだよ。

火の番 おれはまだ死にやあしねえよ。誰が死ぬものか。

捕吏 向きになる奴があるものか。冗談だな。

火の番 冗談だ。何が冗談だ。

捕吏 生きてると言ったのがよ。

火の番 生きてるともさ。当り前だ。死んでたまるものか。

捕吏 分からねえな。お前、冗談が分からねえのか。かう寒くつちやあ、冗談の一つ

も言はなけりやあ、とても遣り切れたもんぢやねえんだ。

火の番 そんな事を言つてると、体でもあつたまるのか。

捕吏 話にならねえ。(行きかける。)

火の番 まあ、あたつて行けよ。

捕吏 (火の番小屋へはひつて、手を暖めながら) 寒いな。

火の番 誰がよ。

捕吏 誰がつて。みんながよ。天気がよ。

火の番 おれは寒かねえ。

捕吏 寒いから寒いと言ふのに、何もさう怒ることあねえ。(火の番答へず) 寒いと

言つたつて、おれが首になる気遣えはねえんだ。(火の番答へず) だが、ここ

いらは吹きつつあらしのせみか、格別また寒いな。

火の番 なあに、もつと寒い所があらあ。

捕吏 そりやあ、あるだらう。

火の番 ぢやあ、なぜそんなむだを言ふんだ。

捕吏 とつたあん。お前今夜どうかしてるぜ。おれはお前が寂しからうと思つて、元

気づけに話をしてやつてるんだ。揚足ばかり取つてやがる。かりにもお客だ。

もうちつとやんはり口を利くもんだ。(火の番、軒をかく) え。とつたあん好

い火の番だ。居眠り火の番か。

火の番 (目を明かないで) あんまりくだらねえ事ばかり言ふから、眠くなるんだ。

捕吏 とてもかなはねえ。(小屋を出る) ぢやあ、あばよ。

火の番 (冷淡に) あばよ。

捕吏 (小屋を離れながら) あばよ。頑固ぢぢい。(行つてしまふ。)

火の番 (立ち上がる) 頑固ぢぢいたあなんだ。おれにやあ名があるぞ。(また坐つて、火をいぢる) あんなおつちよこちよいが、手先の何のと言つて、いばつてゐやがるんだ。やま犬一疋でも、捕まつたらお慰みだ。

(金次郎、出て来る。頬冠り、ふところ手で、尻をはしよつてゐる。火の番小屋の前まで来ると、立ち留る。火の番は囲炉裏ゐろりの火をいぢりながら、金次郎に背を向けてゐる。)

金次郎 ぢいさん。あたらしで貰つても好いか。

火の番 (肩越しにぢろりと相手を見て) あたるが好いやな。

金次郎 ぢやあ、あたらしで貰ふぜ。(小屋へはひつて、手を暖める。火の番の半身、障子の蔭に隠れる) 寒いなあ。

火の番 おれは寒かあねえ。

金次郎 そいつはしあはせだ。おいらは寒いよ。この一月、暖まつたことがねえんだ。

火の番 お前、どこにゐるんだ。

金次郎 片門前の盲長屋にゐたんだ。あすこが又寒い所よ。

火の番 もう、そこにゐねえのか。

金次郎 家賃が高過ぎらあ。(懐を明けて見せる) おいらあもう一文なした。

火の番 酒か。ばくちか。

金次郎 冗談言ひつこなした。おいらあ堅気の商人だ。商売ですつたのだ。

火の番 商売はだめだ。この頃のお上の遣り口ぢやあ商人は上つたりだ。お前、煙草をやるか。

金次郎 御馳走か。有難え。

火の番 おれは遣らねえが、貰つたのがある。(棚から紙に包んだ煙草と煙管きせるをとる)  
煙管は詰つてるかも知れねえぜ。

金次郎 なに、構はねえ。(煙管の火皿を焚火にかざして、それから細い木の枝で煙管を通す。それから煙草を詰める。)

火の番 ひどく手が震へるな。

金次郎 (煙草をすつぱやりながら) 体が悪いんだ。頭がふらふらしてしやうがねえ。

火の番 お前、腹がすいてるんぢやねえか。

金次郎 きにようの朝食つたきりだ。

火の番 早くさう言やあ好いに。(弁当箱を持つて来る) まだ一かたぎぐらゐは残つてゐる筈だ。

金次郎 有難え。有難え。(かぶりつくやうにして食ふ。)

火の番 味が分かるか。

金次郎 (頬ばりながら) うむ。

火の番 腹のへつてる時、さう急いで食つちや毒だ。

金次郎 毒でも好い。(食ひ続けながら) だが、お前、見かけに寄らねえ親切者だな。おらあ帰つてから、こんなにされるなあ始めてだ。

火の番 帰つて来たと、何処から帰つて来たんだ。

金次郎 上方からよ。

火の番 大阪か。

金次郎 (口を一杯にして) うむ。

火の番 何処にゐた。

(金次郎、聞えない振りをする。)

火の番 大阪は何処にゐたよ。

金次郎 川つぷちだ。

火の番 それぢやあ分からねえ、大阪は何処でも川つぷちだ。

金次郎 (慌てて) 北——北だ——北の新地だ。南にも少しゐたよ。東にもゐたな。だが、北だな——おもにゐたなあ北だな。

火の番 何の商売をしてゐたんだ。

金次郎 商売。おれが商人あきんどに見えるか。

火の番 だつて、お前あきんどいま商人だと言つたぢやあねえか。

金次郎 おいらあ職人だ。

火の番 ぢやあ、職は何だ。

金次郎 鍛冶屋だ。

火の番 嘘をつけ。(相手の手を指さす)それが火を掴んだ手か。

金次郎 当てられた。おいらあ、実は釣るのが商売だ。

火の番 魚をか。

金次郎 分からねえ。人を釣るんだ。(賽をふせるやうな真似をする)これだ。

火の番 ばくちか。いかさまをやるんだな。

金次郎 うぶな人間に、世の中の歩きやうを教へてやるんだ。銭の使ひやうを伝授してやるんだ。

火の番 (間を置いて)おれにも一人上方へ行つてる息子があるが有難え事に、お前のやうな奴ぢやあねえ。律気者だ……お前、なぜまともな事をしねえのだ。

金次郎 見たつて分からう。おいらにやあ出来ねえ。おいらあ生れつき、(又賽をふせるやうな科はやくしをする)レコに出来てるんだ。世の中にあ銭のなくしてえ人間が沢山ゐるんだ。おいらあ、その手合をたんのうさせてやるんだ。

火の番 ばくちはいけねえ。地獄へ落ちるぞ。

金次郎 落ちたら落ちた時よ。地獄にも大きなのが出来てるかも知れねえ。

火の番 恐ろしい事を言ふ奴だ。(目をつむつて)南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

金次郎 よせやい。縁喜でもねえ。(弁当箱を返す)でも、お蔭で助かった。有難うよ。

火の番 こなひだも、ここへ狼の辰といふ奴が来た。霰あられの降る暗い晩だった。「あたらしいて貰へるかい。」なんて言やがるんだ。「あたつたら好いちやねえか。」おれはかう言つた。やつぐしよ濡れだ。火へあたると、湯気が立つのよ。恐ろしい顔をした奴だった……お前、いける口だらう。一杯やるか。(貧乏徳利を出す。)

金次郎 (驚いて) いけねえ。そいつあいつたらしもいけねえんだ。

火の番 お前、こなひだお仕置になつた赤羽橋の人殺しを知つてるか。

金次郎 うむ。あいつあ、おれの幼馴染だ。

火の番 あいつがお仕置になつたのは、おれのせゐだ。あいつもここへあたりに来やがつた。

金次郎 (平気で) ふむ。縁があつたんだな。

火の番 殿様伝次は、捕まらねえ内に咽喉のどを突きやがつた。あいつも名高え奴だった。

金次郎 伝次たあ四つ目で一緒にゐた事がある。

火の番 あいつもここへあたりに来たんだ。咽喉のどを突く前に、おれに小判を一枚くれて行つた。まだ持つてらあ。

金次郎 お前、それを使はねえのか。

火の番 使はうと使ふまいと、おれの勝手ぢやねえか。

金次郎 堪忍してくれ。いつもの癖だ。……だが、咽喉が渴いた、一杯やつて見るかな。

(貧乏徳利をとつて、口から飲む——直ぐ、いやな顔をして、口の中の物をほき出し) ペツ。ペツ。こりやあ何だ。

火の番 茶だ。茶だよ。

金次郎 おつそろしく冷つめてえ茶だ。こんなものを夜中に飲ませるどちがあるか。おいらあ、茶なんてものは、もう何年にも飲んだ事がねえ。

火の番 酒ばかりくらつてゐるんだらう。

金次郎 酒あわせぢやねえ。泡盛あわせだ。

火の番 泡盛は毒だ。

金次郎 へ。「ばくちはいけねえ。」……「泡盛は毒だ。」……さうだ。今に「煙草は命と  
りだ。」と来るだらう。

火の番 さうだとも。煙草だつて、好い事はねえ。

金次郎 分かつた。分かつた。もう、よしねえ。なんにも飲まうたあ言はねえから。

火の番 一体お前。何しにこんな所へ来たんだ。

金次郎 え。それはその、いろいろ用があるからだ。

火の番 かう、何かきまつた用はねえのか。

金次郎 そりやあ、ねえ……いや、ある。(調子を変へて)ちゃんとお袋を探しに来た  
んだ。

火の番 めつかつたか。

金次郎 分からねえ。

火の番 分からねえ。

金次郎 会つてくれるかどうか分からねえんだ。

火の番 ぢやあ、みどりは分かつてゐるんだな。

金次郎 う、うむ。大抵みどりは分かつてゐるが、おいらが行つたつて、会つてくれる  
かどうか、それが分からねえんだ。

火の番 そりやあ会つてくれるとも。やつぱり、お前のやうな事をしてゐるんだらう。

金次郎 なぜよ。

火の番 蛙の子は蛙よ。昔からきまつてゐらあな。

金次郎 (変な気持で)さうかね。(居ずまひを直す。)

火の番 お前、くたびれたらう。そんなに堅くなつてるからだ。もつと楽々とあたりね  
え。

金次郎 これで沢山だ。

(間、金次郎何か言ひさうにする。)

火の番 なんだ。

金次郎 お前の息子の事を考へたんだ。上方へ行つてると言つたな。して見ると、どこかでおいらが会つてゐねえものでもねえ。名は何と言ふ。

火の番 会ふ氣遣えはねえ。おれの息子はまつたうな人間だ。

金次郎 それは分かつた。名を言つたつて好いちやあねえか。

火の番 金公よ。金次郎つてんだ。

金次郎 (静にひとり頷く) うむ。それぢやあ、会つた事はねえ。

火の番 当り前だ。九年前に江戸を出て行つた——十九だつたよ、その時な。商売は金物よ。今ぢやあ立派にやつてらあ。

金次郎 飛んでもねえ。

火の番 何が「飛んでもねえ。」だ。

金次郎 どうして、立派にやつてる事が分かるんだ。

火の番 さうに違えねえもの。

金次郎 たよりはねえのか。

火の番 まだ、ねえ。

金次郎 まだだと、九年もたつてるのにか。

火の番 忙しいんだ。せつせと稼いでるんだ。もうたいしたものになつたに違えねえ。

金次郎 さうありてえものだ。だが、若し、ぢいさん。若しさうでなかつたらどうする。

火の番 そんな事がありやう筈がねえ。あいつはまつたうな人間だ。

金次郎 又まつたうだ。まつたうだつて、思わく違えといふものがあらあ。

火の番 ばかあ言へ、あいつは子供の時から、近所の褒め者だつた。酒も飲まねえ。ばくちは元よりだ。どうしたつて出世をする男に出来てるんだ。

金次郎 いつもさうとはきまらねえ。

火の番 だが、あいつはさうだ。

金次郎 だが、どうして……（言ひ淀む。）

火の番 どうしてだと。何がどうしてだ。

金次郎 だからよ……その……だからよ。（問ふべき事を考へる）誰かにたよりがあつたのかよ。

火の番 うむ……一度あつた。

金次郎 誰によ。

火の番 （にがい顔をして）お前の知つた事ぢやねえ。

金次郎 ふむ。ぢやあ、お前の嫌ひな人間にでもたよりがあつたのか。

火の番 （少し熱して）近所の娘のところへ手紙をよこしやあがつたんだ。向ふへ着くと直ぐに書きやあがつたんだ。いやらしい手紙よ。「故郷が恋しい」なんて書きやあがつて。

金次郎 そりやあ恋しいだらう。

火の番 （怒つて）稼ぎに行く奴が、故郷が恋しいもねえもんだ。その娘め、倅と夫婦約束がしてあるなんて言やあがつた。ばかばかしい。だから、おれはさう言つてやつた。もうみんな忘れちまつてらあつてよ。

金次郎 う。うむ。娘の方でももうお前の息子の事は忘れつちまつてるだらう。もうずつと前によ。

火の番 ところが忘れねえんだ。まだ、それを言つてやがるんだ。

金次郎 なんだと。それぢやあ、まだ嫁に行かねえのか。

火の番 かう諸式が高くつちやあ、うっかり嫁にも行けねえのさ。おまけに、好い時分を逃してしまつちやあな。

金次郎 （熱心に）ところで、おいらお前に一つ聞きてえ事がある。こりやあ、唯、その、お前の考へが聞きてえんだ。よしか。若し、お前の息子がしくじつたとするな。そいつが困つて、帰つて来たとするんだ……運が悪くてよ……以前とは

違つてよ。牢にでもへえつて来たとするんだ……

火の番 (怒つて) お前、うちの金次郎の事を言つてるのか。

金次郎 さう怒つちやいけねえ。おいらあ、唯お前の考へが聞きてえんだ。

(捕吏が出て来て、火の番小屋の横に身を寄せ、そつと二人の会話を聞いてゐる。)

火の番 よせ。さつきから言つてるぢやねえか。息子はそんな奴ぢやねえよ。

金次郎 だが、人間には運不運といふものがあらあ。

火の番 稼ぐ人間に運も不運もあるものか。

金次郎 でも、病気をするとか怪我を何とかしたらどうする。

火の番 そんなら手紙をよこす筈だ。

金次郎 若し手紙をよこさなかつたら――

捕吏 (前へ出る) 若い。そのぢいさんにからかつたつてむだだ。しやれも冗談も分かる親爺ぢやねえんだ。

火の番 又来たな。また何か冗談を言ひに来たのか。

捕吏 さうだ。寒くつてたまらねえんだ。

火の番 この若いのは冗談を言つてるんぢやねえんだ。

金次郎 さうだとも、おいらあ、唯、ぢいさんの考へを聞いているんだ。聞いたつてしやうのねえのは分かつてるんだが。

捕吏 お前、この頑固ぢぢいを知つてるのか。

金次郎 どうして。知るわけがねえや。

捕吏 知つてねえとも限らねえ。だが、ぢいさんの言ふ事を聞いてりやあ間違ひはねえよ。

火の番 それも冗談か。

捕吏 やつと分かつたか。

金次郎 (立ち上がる) ぢやあ、もう行くぜ。大きにお世話だった。

火の番 まあ、坐れ。さう急ぐこたあねえ。

金次郎 うむ……だが……

捕吏 おれの顔を見て、直ぐ出かけると、お前うろんに思はれてもしかた為方ねえぞ。

金次郎 お前さん、何の商売だ。針でも売るか。

捕吏 なぜよ。

金次郎 ちくうり刺すからよ。

捕吏 (笑つて) こいつあ好い。

火の番 若いのが、とても上方にやあめえな。こんなお手軽なお手先様は。

捕吏 (金次郎に) お前、上方から来たのか。上方は何処にゐた。

金次郎 堺だ。

火の番 お前、さつき大阪だと言つたぢやねえか。

金次郎 堺が一番長くゐたんだ。

火の番 ぢやあ、さつき、なぜ大阪にゐたなどと言つたんだ。

金次郎 大阪の話が出たから、大阪にゐたと言つたんだ。さう揚足がとりたけりやあ、相撲とりにもなるが好いや。

捕吏 (金次郎に) お前、上方で何をしてゐた。

金次郎 町奉行をしてたかも知れねえ。だが生憎さうぢやあなかつた。

捕吏 ぢやあ、何をしてゐた。

金次郎 川口で荷揚をしてゐた。

火の番 (驚いて) お前、さつきは……

金次郎 (烈しく火の番を睨みつけて) 黙つてろ。ぢぢい。

火の番 (呟くやうに) さうか。それで分つた。そんならさうと早く言やあ好いに。

捕吏 とつつあん、どうした。目を白つ黒してるぢやねえか。

火の番 (捕吏の方へ向き直つて、烈しく) お前の知つた事ぢやあねえ。どうして、さうお前は疑り深えんだらう。さう人の事に一々口を出すもんぢやあねえ。

捕吏 (驚いて) どうした。どうした。おれは唯当り前に聞いてるんだ。(金次郎に)

役目だけで聞くんだ。返答をしてくれるか。

金次郎 (不安心に) するとも。

捕吏 よし。

金次郎 お前さんの来た時、おいらあぢいさんの考へを聞いてみたんだ。

火の番 さうだ。ばかな事を聞いてやがったんだ。うちの金次郎がどうだのかうだのと。

金次郎 やつぱり、おいらあもう行くぜ。大きに世話だった。御免ねえ。旦那。

捕吏 まあ、待て。ちよつと気になる事があるんだ。

金次郎 冗談ぢやねえ。(行きかける)

捕吏 まあ、待て。行くな。どうも、お前はおれの尋ねてる代物しろものらしいぞ。(捕吏も

動かない。金次郎も動かない) お前、おれのところへ来て、一晚暖まつたらどうだ。夜ぢう雪ん中をうろつくよりやあ好いぜ。どうだ。

金次郎 それにや及ばねえ。

捕吏 大方さう言ふだらうと思つた。

(捕吏、いきなり小屋へ飛び込む。金次郎、すりぬけるやうにして、小屋を躍り出る。直ぐ姿が見えなくなる。捕吏、帯の間の呼笛よびを探りながら、あとを追ひかける。)

火の番 やつぱり、さうか……(小屋を出て、遠くを透かして見る。呼笛鳴る。火の番、雪に手をかざす。呼笛また遠くて鳴る) あいつ一人ぢやだめだらう。(間) 見えねえ。(間) 角を曲がつたな。(ずっと遠くて呼笛が鳴る) いくら吹いたつて聞えるものかな。(呼笛の音が少し近くなる) や、又こつちへやつて来たな……(延び上つて見る) さうだ。(ずっと近くで呼笛が鳴る) また角をこつちへ曲がつたな……(小屋へはひる) 人の事だ。引つ込んでるよう。(障子を少し引く。)

(呼笛、直ぐ近くで鳴る。金次郎、息を切らして、駈けて来る。小屋の前で転ぶ。)

捕吏、あとを追っかけて来て、金次郎の起き上がらうとするところを捕まへる。)

金次郎 (喘ぎながら) よし。捕まつた以上は神妙にする。

捕吏 神妙にすると。感心な奴だ。まあ面を見せよ。(金次郎の顔を火の方へ向ける。)

金次郎 (反抗して) 神妙にするから……そんな事はするな。

捕吏 火の側へ来い。

金次郎 (烈しく抵抗する) お前、おいらの面に見知りは何え筈だ。

捕吏 ぢぢいに見せるのだ。

金次郎 いけねえ。そりやあいけねえ。(烈しく抵抗する。)

捕吏 見せねえか。ぬすつと。見せねえか。

金次郎 (急に抵抗するのを止める。)

捕吏 見せるか。

金次郎 為方がねえ。どうともしろ。

(二人、火の側へ歩み寄る。不意に、金次郎、身を屈めて、捕吏の両足に抱きつき、

捕吏を仰向けに倒す。金次郎、逃げる。)

捕吏 (はね起きて) 畜生。(あとを追ふ。)

(金次郎、直ぐ又小屋のうしろから出て来る。)

金次郎 見当違ひへ行きやあがつた。(呼笛鳴る。金次郎、小屋を覗く) ぢいさん、あ  
ばよ。

火の番 (少し顔を出して) あばよ。達者でゐねえ。

金次郎 何か。お前んとこの婆さんは達者か。

火の番 ばあさんは死んぢまつた。

金次郎 死んだ。息子の帰るのを待たねえてか。

火の番 何を云つてるんだ。早く行け。達者でゐろよ。

金次郎 (声を飲むやうにして) ちゃん。

(金次郎、逃げ去る。呼笛遠くで鳴る。火の番、嘲笑ふ。)

—幕—

(大正十一年七月)

底本 日本文学全集 64 現代名作集(二)

昭和四十五年十一月一日発行

発行所 株式会社筑摩書房